

就任のご挨拶



院長 澤田 親男

4月1日付で院長に就任しました澤田親男です。

これまで長年にわたり院長としてご尽力いただいた谷直介名誉院長から引き継ぐ形となりました。前任者に対する敬意を表し感謝を申し上げますとともに、歴史のある当院の管理者としての重責に身の引き締まる思いです。今回は私の自己紹介と所信を記します。

■大学病院時代

私は平成6年に京都府立医科大学を卒業し、精神医学教室に入局し、その後大学病院の精神科で4年働きました。大学病院での臨床は精神病や気分障害をはじめとして広い範囲での診療をしました。精神科以外の病棟に身体の病気で入院中の患者さんのなかに、「せん妄」や「うつ」をはじめとした精神科の問題を合併する患者さんもたくさんいましたので、病院内で連携をして精神科の診療をする「コンサルテーション」

エゾン」の仕事も多く経験しました。週に1回、大学病院以外の病棟の非常勤医として、その時代はまだ数が少なかった緩和ケア病棟（ホスピス）でも働く機会があり、勉強になりました。

■府立洛東病院リハビリテーション科

大学で4年働いた後、洛東病院でリハビリテーション科医として働きました。脳卒中などで麻痺や認知機能の障害を持った人のリハビリテーションの仕事をするのですが、この病院でもコンサルテーションエゾンや末期がんの緩和ケアの仕事などもさせてもらいました。洛東病院では内科当直業務もあり、身体的疾患の診断や治療の経験をできたことは幸運でした。

■北山病院での認知症治療

洛東病院で2年働いた後、平成12年北山病院に就任しました。谷院長をはじめとした先輩方からいろいろ教えてもらいながら、それまで大学にいた教える側から患者さんや家族の方へ「北山病院で診てもらおう」と思っていたいただき、「ここで診てもらえてよかった」と感じていただけのように、また、連携する病院や診療所の先生方には「北山病院で診てもらえたら、安心だ」と思っていただけのように努めなければならぬと思っています。病院は患者さんやご家族さんの幸せを目標とするのですが、同時に地域の皆さんや我々医療・介護に携わるものの幸せも目標とします。職員にも「この病院で働きたい」と思ってもらい、どこかの病院で働きたいと思っている知人や親戚がいれば「北山病院は働き甲斐がある、いい病院だよ」と言ってもらえるような病院であり続けたいと考えています。

北山病院は青年期から高齢者まで、疾患としても精神病（統合失調症など）、気分障害（うつ病など）、認知症、その他さまざまな疾患を持つ患者さんの診療を幅広くしていますが、どのような患者さんに対しても常に敬意と好意をもって寄り添い、よく話を聴き語り合い、ともに歩むという姿勢が必要なのだろうと思っています。

「自分が患者さんの立場だったらどう思うだろう」「自分が患者さんの家族だったら医者の

ら、多職種が互いの立場を理解しながら協力し、患者さんやご家族へのサービスの質の向上を図ることを実践すべく努力してきました。平成21年、左京医師会の理事になり今に至るまで理事をやっているのですが、ここでは左京の精神科以外の医師と沢山出会えました。地域で様々な診療科の医師と知り合いになることは病院と診療所との連携（病診連携）病院と他の患者さんに利益をもたらしてくれそうです。

■当院が目指すこと

北山病院をどういう病院にしたいかということですが、質の高くあたたかい医療や介護を提供し、患者さんや家族、それに働く職員にも「選

や洛東病院では経験できなかった精神科病院での本格的な精神科医療を経験できました。認知症疾患療養病棟「いずみ」の病棟医となったこともあり、私の臨床の仕事は認知症の患者さんが約半分、残りの半分が認知症以外の患者さんの診療となりました。たくさんの方の患者さんの診療をしながら認知症という病気について、認知症の地域連携の必要性について自分なりに勉強をしました。認知症は家庭や社会で活躍していた人の認知機能が低下し、これまで出来ていたことが難しくなるものです。本人はもちろん家族の不安や困惑も強いいため、認知症診療は本人のケアとともに家族さんのケアもとても大切であり、簡単ではありませんが、やりがいのある仕事です。

■連携の大切さ

平成18年、38歳で診療部長になってからは、谷院長に病院の運営に関していろいろ教えてもらうようにしたいと思っています。説明やスタッフの対応をどう感じるだろう」と、相手の立場をイメージすることを常に心がけるようにしたいと思っています。

これからも、全ての職員が、より良い医療・介護を提供できるように努めてまいります。何卒よろしくお願いいたします。

